

はんにやしんぎょう
『般若心経』について (五)

野口圭也 (種智院大学客員教授)

Ⅲ. 『般若心経』の内容について (3)

4. 「舍利子」について

「舍利子」のサンスクリット原語は、Cāriputra です。これはシャーリプトラという名前の、お釈迦様のお弟子さんへの呼びかけの形 (呼格) です。シャーリプトラは、お釈迦様の大勢のお弟子さんの中でも特に有名な「十大弟子」の一人で、「智恵第一」と言われていた方です。名前の前半の「シャーリ」とは鳥の一種で、岩波文庫の中村元・紀野一義両先生訳の訳注 (p. 23) では「サギの一種」とされています。「プトラ」とは「息子」の意味。従って「舍利子」とは、「舍利」がサンスクリット「シャーリ」の音を写した音写語で、「子」は「プトラ」の意識、ということになります。また「プトラ」も音写して「舍利弗」と訳されることもあります。あえて全体を意識すると「鷺太郎」。中村・紀野訳の訳注には「『鷺鷺子』と訳されることがある」とあります。「鷺」とは中国南方の湖水に住む、青黄色で鶴に似て足が長い水鳥です (『大漢語林』 p. 1585)。これも「意識+意識」です。

一方、サンスクリットの辞書を見ると、sāriは「一般的には英語で maina(myna)=東南アジア産のムクドリ科の鳥の総称、学名 Gracula Religiosa と Turdus Salica の両方」と書いてあります。そこでインドの鳥の本を調べると、grackle (hill myna) という鳥が Gracula Religiosa に相当します。英語の grackle は英和辞典には「ムクドリモドキ、時にオオムクドリモドキ」と訳されていて何のこっちゃと思いますが、九官鳥のことです。一方 Turdus Salica は、サンスクリット vacakāraṇā (言葉を語る鳥/オウム) のところから出てきますので、これも九官鳥のような言葉を話す鳥であろうと思われれます。ちなみに種名の Salicaは、サンスクリットの sārīkā(=sāri) から取られたようです。これも敢えて日本語に訳すと「九官郎」、これだと読みにくいので、「官九郎」という感じでしょうか。

なおシャーリプトラを「身子」と訳すことがあります。例えば真言宗豊山派で用いている大般若経 転読法要の法則の表 白文中にも出てきます。これは「舍利」という音写語が、「身体」を意味するサンスクリットの「シャリーラ (śarīra)」に対しても用いられることから来た、誤った意識です。まず、この「舍利」は、「仏舍利」と言われるように、特にブツダすなわち釈尊の遺骨のことを指します。「舍利子」の「舍利」が、「身体」の「舍利」と同じだと思って、「身」という訳語を誤ってつけたのが、「身子」ということばです。

5. 「色不異空、空不異色、色即是空、空即是色」について

『般若心経』において、と言うよりも全仏教経典の中でも日本で最も有名な句の一つが、この「色即是空」でしょう。「色」という語は、眼という感覚器官の対象としては「いろ・かたち」の意味ですが、ここでは「いろやかたちのあるもの」ということで、五蘊の内の一つである物質的存在を指しています。このあと続いて、他の4つの蘊も「また同様である」と言っていますので、この部分は先に出てきた「五蘊皆空」という句を受けて、五蘊のうち、まず色蘊が「空」であると言明しているわけです。五蘊は全体で私たちの物質的身体と精神作用を表します。この「色」は「物質的身体」つまり「肉体」を指しています。

この部分のサンスクリットは次のようになっています。

①-A rūpaṃ śūnyatā,

①-B śūnyataiva rūpaṃ.

②-A rūpān na prthak śūnyatā, (空不異色) ②-B śūnyatāyā na prthag rūpaṃ. (色不異空)

③-A yad rūpaṃ sā śūnyatā, (色即是空) ③-B yā śūnyatā tad rūpaṃ. (空即是色)

AとBは、基本的に主語と述語、主文と従属文を入れ替えているだけです。③は関係代名詞を用いた文です。この部分は、サンスクリット文と漢訳とに多少の異同があります。漢訳の「色不異空、空不異色」は、サンスクリットでは主語・述語の順序が入れ替わって「②-A 空性は色と別ではない。②-B 色は空性とは別ではない」となっています。漢訳はサンスクリットの語順のままに訳出されています。また「色即是空、空即是色」に相当するサンスクリットは、①と③の両方の可能性があります。どちらの訳文にもなりえます。中村・紀野訳では③の訳に充て、玄奘訳では①の訳語が欠けているとしています(pp. 25-26)。立川武蔵先生の『般若心経の新しい読み方』では①に充て、③は玄奘訳には欠けているとしています(p. 134)。大本系の漢訳では、「色即是空～」の句は③の訳に充て①には別の訳語を用いているものがありますが(法月訳・般若共利言等訳・智恵輪訳)、①の訳としているものもあります(法成訳・施護訳)。上記のテキストでは中村・紀野訳に従いました。

ここで問題となるのは漢訳の「空」にあたる śūnyatā の解釈です。「五蘊皆空」の「空」は śūnya で、これは形容詞でした。ここの śūnyatā は、śūnya に抽象名詞を作る接尾辞-tā が付いて、抽象名詞になっています。従って直訳すると「物質的存在は、空なるものである」ではなくて「物質的存在は、空なることである」となってしまいます。これでは何だか変ですね。立川先生の本でも、この箇所について文法的におかしいのではないかと指摘し、チベット語訳やインドの注釈も参照して詳しく論じています。訳文は「色(いろ・かたちあるもの)は空性である」としています(第6章)。一方、宮元啓一先生の『般若心経とは何か』では、「抽象名詞であるがために、具体的でかつ臨在的である」として、

śūnyatā を「ただたんに空だというだけでなく、その色かたちに即してまさにそのものずばり目の当たりに空なのだ」というように解釈しています。(p. 104-p. 109)。

しかし「そのものずばり目の当たりに」というニュアンスは、むしろ①から③の三通りの、語順を入れ替えたり関係代名詞を使ったりした表現の仕方で表されているのではないかと、私は思います。そして śūnyatā ということばは、抽象名詞としての「空であること、空であるという状態・性質」から転じて、「空である状態にあるもの」の意味で理解できないか、と考えています。宮元先生も例として挙げているサンスクリットの devatā ということばは、「神」を意味する deva ということばに同じく -tā が付いていますが、一般的には「神であること」「神性」ではなく、個別の神格・尊格を表しています。「本尊」という時も、この語を用いています。すなわち、「神である状態」「神という性質」ではなくて、「神である状態にあるもの」「神という性質を持つもの」を意味しているわけです。この śūnyatā の場合も、同じように考えることができるのではないのでしょうか。

この部分を和訳してみましよう。

物質的存在[である肉体]は、本体を欠いている状態にあるもの(=空なるもの)である。空なるものとは、まさしく物質的存在に他ならない。物質的存在は、空なるものとは別ではない。空なるものは物質的存在とは別ではない。およそ物質的存在であるもの、それがつまり空なるものである。およそ空なるもの、それがつまり物質的存在なのである。